

令和 7 年度 赤磐市被害地域専門家緊急投入事業
～活動実績報告～

株式会社野生鳥獣対策連携センター

目 次

① 多賀地内（2025 年 7 月 8 日実施）	2
② 惣分地内（2025 年 8 月 8 日実施）	7
③ 多賀地内（2025 年 8 月 21 日実施）	10
④ 東軽部地内（2025 年 10 月 1 日実施）	13

① 多賀地内（2025 年 7 月 8 日実施）

【現地踏査】 2025.7.8、15:00～17:00

【背景と相談内容】

- 例年、中小型獣類によるぶどうの食害が発生しているため、箱わなとアライグマ専用捕獲機アラホール（太田製作所製）による捕獲を試みているが、なかなか捕獲に至らないため、技術指導を頼みたい。
- 山中に設置したイノシシ捕獲用の檻についても、捕獲効率向上に向けたアドバイスがほしい。



指導対象エリアの概要図

【聞き取り調査】

＜中小型獣類の捕獲について＞

- 現状、箱わなにはぶどうの他、キャラメルコーンやピーナッツクリームを塗布したパン、肉類等を入れているが、入口近辺のエサは食べられるものの、わな奥のエサを食べる気配がない。
- ボチボチ、ハウス内のシャインマスカットが食べ頃を迎えているので、これをエサに使用しようと考えている。
- アラホールには、中にピーナッツクリームを塗布しており、雨水が入り込まないように天井の開口部には紙コップをかぶせている。紙コップの上に置いたエサは盗られる

が、捕獲には至っていない。



箱わなの設置状況（左）とアラホールの設置状況（右）

<イノシシ捕獲について>

- 地元猟師の支援を得て、自宅北東部の林内にイノシシ用の箱わなを設置している。
- モモをエサに入れており、最近になってエサが完食されるようになった。
- わな内に入れていたトレーも持ち出されており、ボチボチ捕獲できるのではないかと期待している。
- 確認時は、扉を固定しており、まだ稼動する状態ではなかった。

【指導内容】

<中小型獣類の捕獲について>

- 現地を踏査した結果、付近の防草シート上の足跡から、少なくともタヌキとアナグマが徘徊していることを確認した。
- 一部、ハクビシンの足跡らしき痕跡も認めたが、判然としなかった。
- 防草シートやマルチシート上の足跡は、雨が降ると流れて消えるため、足跡が新しいものだと判断できるため、加害獣種の判定に役に立つことを解説した。
- 周囲の環境から、中型獣類は園の西側を流れる砂川方面からアプローチしている可能性が高いことを伝えた。
- 箱わなを設置する際は、侵入方向を予想し、園内のエサに到達するより手前に設置することが望ましいが、園内の作物が自由に食べられる状況だと、捕獲には不利に働くことを解説し、園の外周部に電気柵を敷設することが、捕獲成功率の向上には重要であることを伝えた。また、ネット柵による侵入防止効果は、期待できないことも伝えた。

※中型獣類用の電気柵は、10～15 cm間隔で3段張りが目安。

- 中型獣類は、河川や側溝、防風林など、身を隠して移動できる環境を好んで利用すること、及び水を張った田んぼの縁などを好んで歩くことから、下図のとおり、想定される移動ルートを示し（黄色矢印）、わなの設置候補地（水色×印）を提案した。

今回は、ぶどう園地の南側に被害が集中するということで、南方面の移動ルートをターゲットとした。



- 箱わなは、できるだけ平らな場所に安定させて設置すること（ぐらつくわなは警戒される）、及び転倒防止のため、ペグ等で固定することをお勧めした。

- わなは、獣道を塞がないように、道の端に控えて設置することで、警戒を誘発しにくいことを解説した。

- わなのトリガーは、踏み板式でもエサ吊り下げ式でも、捕獲効率に差は出ないが、吊り下げ式の場合は、少し奥行きが必要なことを伝えた。

※間口が 30 cm×30 cm、奥行きが 80 cm以上のものを推奨。



提案した箱わなの設置候補地（黄色矢印部付近）

- アライグマを捕獲する場合は、扉がメッシュではなく、板のタイプの方が、逃走リスクが低くなることを解説した。
- トリガーの稼働重量は、400g くらいに設定しておく、幼獣 1 頭やネズミ類、イタチなどではわなが作動せず、複数の幼獣や成獣が入ったタイミングで捕獲できることを伝えた。
- エサは、新鮮なものの方が捕獲しやすいため、日持ちのしやすい果物（マニュアル参照）や、小袋入りのお菓子（油の匂いと甘い味を好む）、ドーナッツやパン類を選ぶことをお勧めした。ただし、軽いお菓子を使うと、ネズミ類による持ち逃げが多発するため、少し重量のあるエサを使うか、ペグ等で固定することをお勧めした。
- アラホールについては、中にマシュマロを入れる方法を提案した。こうすることで、奥のマシュマロを掻き出そうとしたタイミングでトリガーが作動することを伝えた。

【現地踏査】 2025.8.6、17:00～18:00

【対応内容】

- 相談者より連絡があり、ブドウの食害が発生し始めたため、箱わなを設置したものの、なかなか捕獲されないため、わなの設置場所及び捕獲方法について、指導を要請された。
- 食害されていたブドウはピオーネであり、痕跡から加害獣種はテンであると考えられた。根拠は、ハクビシンやアライグマによる被害で認められる皮の吐き出し痕がないこと、カラスによる被害で認められる果軸の疵（くちばしによって果軸を切断しようとした痕）が無かったことである。
- 相談者が独自に設置したカメラでは、キツネが撮影されていた。
- 一般に、テンによる食害の場合、ハウスの被覆ビニールなどを観察し、外壁に登攀痕が多く残る場所に箱わなを設置するが、相談者の園地は、外周をネット柵で覆っており、裾部分のどこからも侵入可能であったためか、外周のビニールには明確な登攀痕は検出できなかった。
- そこで、今回は、ひとまず被害園地の東側のビニールハウスとの境界部に箱わなとセンサーカメラを設置し、撮影状況等を見たうえで、捕獲場所を再検討する方針とした。
- 箱わなには、食害にあったピオーネの残渣を投入した。
- また、なお、天井のビニール上には吐き出したブドウの皮が散乱していたことから、テン以外の動物による被害の可能性もあると考え、被害園地の天井部との隙間部分にセンサーカメラを設置し、加害獣種の特定を試みることにした。



【現地踏査】 2025.8.8、17:00～17:30

【対応内容】

- 設置済みのセンサーカメラのデータを回収、内容を確認したが、動物の撮影データは

一枚も無かった。

- 併設していた箱わなでも誘引エサは食べられておらず、反応は無かった。
- 相談者への聞き取りでも、昨晚までは被害が出ていないとのことで、加害獣類の来訪は無かったものと推察された。
- 相談者によれば、今週末までにすべてのブドウを収穫してしまう予定だが、加害獣類の除去は必須であると考えており、箱わなの設置は継続するとの情報を得た。
- センサーカメラは、2台とも継続設置することとした。

<箱わなによるイノシシの捕獲について>

- 中型獣類と同様に、わなを設置する際は、対象動物に警戒されにくくするため、獣道を塞がないように設置することをお勧めした。
- 蹴り糸の位置は、入口から 110～120 cm 程度、地面から 40～60 cm 程度に設定し、十分に餌付くまではトリガーをセットしない方法を指導した。こうすることで、幼獣のみでわなが作動することを防ぐとともに、成獣個体も複数頭を同時捕獲できたり、連続で捕獲できる確率が高まることを解説した。
- 誘引に使うエサは、わなの外で食べるものなら何でもよく、完食されたら徐々にわなの奥にエサの位置をずらし、わな奥へと誘導する方法を指導した（資料参照）。
- くくりわなでも、箱わなでも、最も大切なことは、イノシシやシカが頻繁に通る獣道を選ぶことであり、そのためには地形や環境を読むことが重要であることを伝えた。特に、アップダウンの少ない尾根線のルートや、森林と森林が近接している場所などは、利用ルートを絞り込みやすいことを解説した。
- 傾斜が緩い尾根線部で捕獲をする場合は、大きな倒木などを探し、シカやイノシシが跨いだ痕跡を見つけて、着地点を予測する方法を解説した。
- シカもイノシシも、多い方から捕獲されるため、シカが多い地区ではシカがよく捕獲され、イノシシが多い地区ではイノシシがよく捕獲されることを解説した。

② 惣分地内（2025 年 8 月 8 日実施）

【現地踏査】 2025.8.8、16:00～17:00

【背景と相談内容】

- 5～6 年前からニホンザルによるブドウの食害が毎年発生するようになったと聞いている。
- 当時は、侵入防止柵等も敷設しておらず、食べられ放題であったと聞く。
- 令和 6 年より、相談者が園を借りて生産活動を行うようになったが、3 房程度の被害発生を受けて、電気柵を敷設した（地上から 10 cm、20 cm、30 cm、70 cm、80 cm に電線）ものの、ニホンザルの侵入があり、計 50 房程度の食害が発生した。
- 状況から、ニホンザルは、地上 30 cm～70cm の隙間をすり抜けたものと考え、令和 7 年は地上から 40 cm と 50 cm の所に防鳥糸を敷設したが、今年も 3 房程度の被害が発生した。
- 令和 6 年は、3 房の被害が発生した後、2 週間くらいで大規模な被害が発生したため、被害抑制のための効果的な対策を教えてください。
- 月末までにはすべてのブドウの収穫を終える予定なので、それまでに大規模な被害発生を抑制したい。

【被害発生状況の確認】

- 食害を受けたブドウは、袋を破り、粒を数粒食べられた状態であった。
- そのうち 1 房は、果軸をちぎって食べられており、ちぎれた房は干からびた状態で地面に落ちていた。
- 食痕の状況から、加害獣種はサルではなく、テンなどの小型獣類であると考えられた。
- 相談者への聞き取りでは、付近では最近もニホンザルの目撃が相次いでおり、近くニホンザルについても侵入する可能性が高いと考えられた。

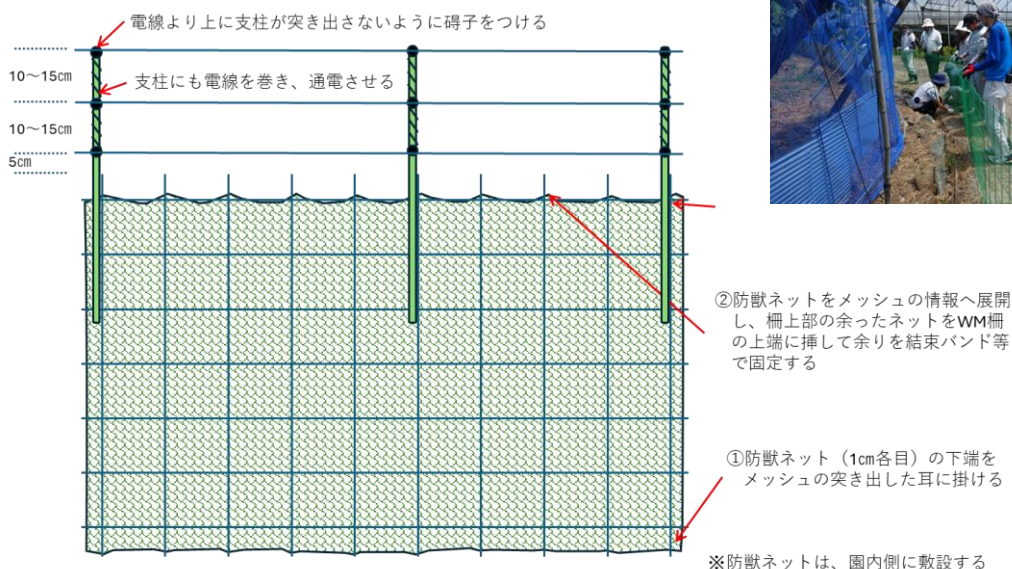
ブドウの食痕（右）



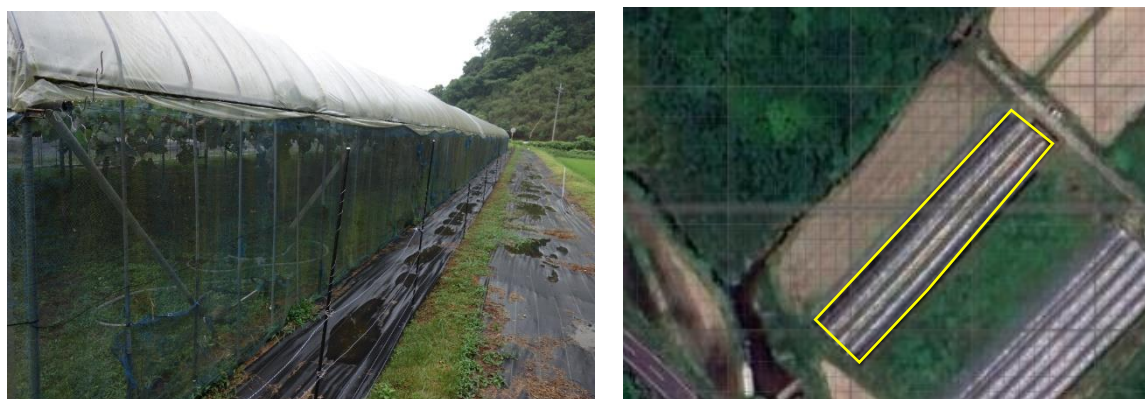
【指導の実施】

- 園地に跳び込んで侵入するニホンザルの場合、地面から足が離れて回路が成立しないため、通常の電気柵では、柵線の段数を増やしても侵入を抑制できないことを説明した。
- ニホンザルの対策では、WM 柵と電気柵を組み合わせた複合柵が有効であることを説明し、複合柵の設置方法について解説した。

■具体的には、15 cm×15 cm目合いの WM 柵（1m×2m）の内側に 1 cm 目合いの防獣ネットを貼付する方法を紹介した。防獣ネットの貼付に際しては、WM 柵の裾部分の耳に挿して引き上げることで、弛み無く簡単に貼付できることを解説した。



■複合柵の設置に際しては、周囲の構造物から 2m 以上離すことが基本だが、本指導対象地では、周囲の立木等からの距離も十分であり（下写真）、複合柵の設置には適した環境であることを伝えた。



電気柵の敷設状況（左）と周囲の障害物からの距離について（右）

■赤磐市の補助事業では、既に電気柵を敷設済みの園地でも、機能向上のため WM 柵や防獣ネットを追加する場合に補助を受けられるとのことであったため、設置に際しては、市の補助を活用することをお勧めした。

■WM 柵は、隣接する農地との調整がうまく行けば、上段の畑の縁（右写真黄色線）に設置するのが望ましいが、上段の畑の土地所有者との調整が難しければ、できるだけブドウ棚に近づけて（右写真水色線）設置し、足場位置が高くなる上段の畑から離して設置することをお勧めした。

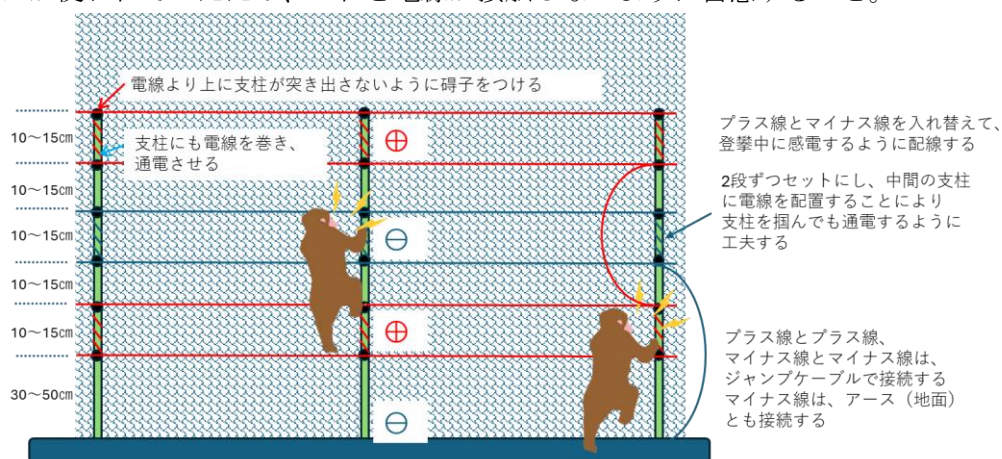


■提案の結果、今年のブドウの収穫は月末までに終わるということで、今年は WM 柵の設置は見送るという結論に達したため、少ない労力で被害防止に効果が認められる代替案として、既設の防風ネットと電気柵を活用した簡易複合柵の設置を提案した。

■提案は、サルが電気柵を跳びこんで侵入するという特徴を考慮して、電気柵の敷設位置を既設の防風ネットに近接させることで跳びこみを抑制するという方法で、追加の資機材が不要という利点がある。

■裏側に防風ネットがあることで、跳びこむことができなくなったサルは、直接ネットや電気柵の支柱を使って登攀することが予測されるため、登攀中に電気ショックを受けるように、配線の工夫をすることを提案した。

■防風ネットと電気柵の距離はできるだけ近くするが、防風ネットの支柱にアルミパイプが使われていたため、これと電線が接触しないように留意すること。



※防風ネットに近接させて設置することで、跳びこみによる侵入を抑制できる

防風ネットに近接させて電気柵を敷設する簡易電気柵のイメージ図

② 多賀地内（2025 年 8 月 21 日実施）

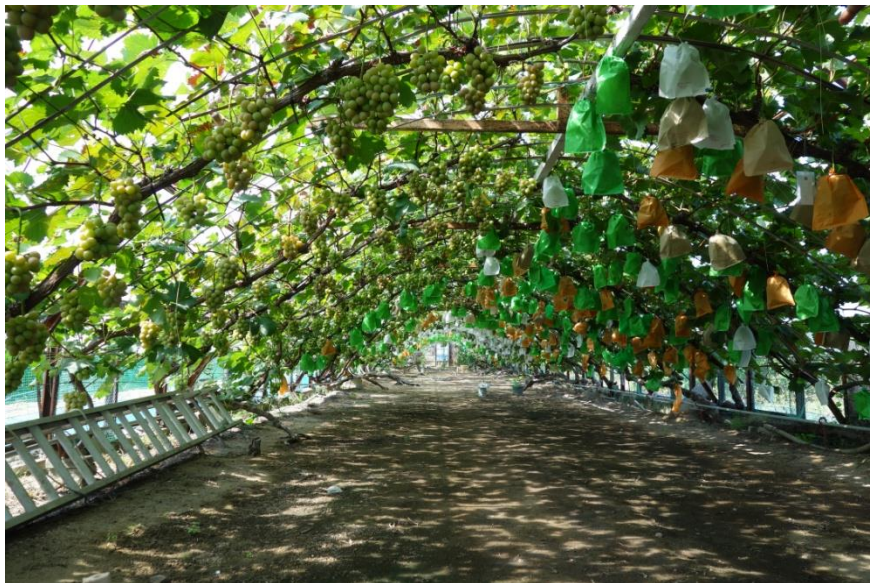
【現地踏査】 2025.8.21、15:00～17:00

【背景と相談内容】

- 中型獣類によるものと思われるブドウの食害が発生している。
- 隣接する園地では、1 日数粒ずつ実が食べられる被害が発生していたが、それとは異なり、房単位で被害が出ていることから、ハクビシンやアナグマ等による食害の可能性が高いと考えられていた。
- 被害対策として、埼玉県農業技術センターが開発した「楽落くん」の設置を検討しており、設置のコツやポイントを指導してほしいとのことであった。



- 対象園地は、古いガラスハウスで、壁際に植えたブドウの樹がアーチ状に枝を伸ばし、それに沿って房をつける樹形で仕立てられていた。



ガラスハウス内のブドウ栽培の様子

- 外周には、亀甲金網や防風ネットが貼り付けられていたが、複数箇所に突破された痕が認められ、天井部ではなく、地上から侵入されているものと考えられた。
- 被害は、地上から 50 cm 程度くらいの高さに集中しており、現時点では高い場所の被害は発生していなかった。

■食痕は、房ごと食べられており、地面には皮の吐き出しは認められなかった。



ブドウの食害の発生状況

■前日に、ハウスの外側に地元猟師の方が仕掛けた箱わなによりタヌキの幼獣 1 頭が捕獲されていたこと、及び周辺の防草シート上にタヌキのものと思われるイヌ科動物の足跡が多く残っていたことから、加害動物はタヌキである可能性が高いと判断された。

■指導時に集まっていたいただいた他の生産者さんの園地でもブドウ被害が発生しており、指導対象園地の西側では、マクワウリの食害も発生していた。

指導対象園地（黄色枠内）と
タヌキを捕獲した箱わな
（水色立方体）、及び
マクワウリの食害地
（オレンジ色エリア）



■ハウスの外周には、相談者が防風ネットを追加で設置しており、ネットの上方 5 cm 程度の所に電線を敷設していた。

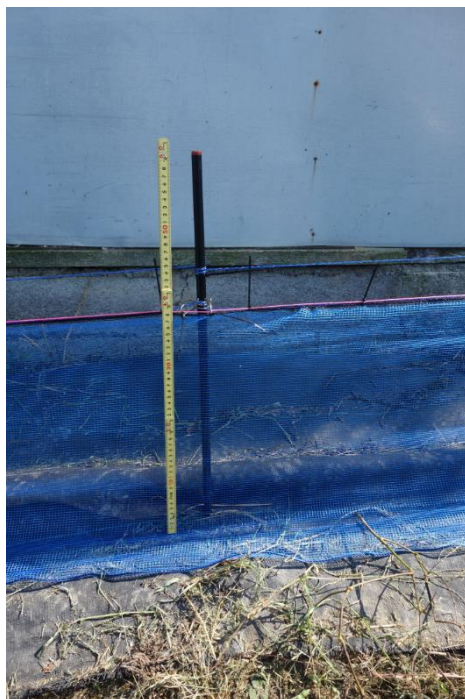
■敷設されていた防風ネットは 50 cm の幅であり、裾 10 cm は外側に折り返されていた。

■この後、折り返したネットの上に追加で防草シートを敷設予定とのことであった。

- 防草シートの下には、5年前に敷設した防草シートが敷かれており、傷みは見られたものの、まだ防草機能は維持されていた。



防風ネットと電気柵の敷設状況



【指導の実施】

- 既に防風ネットが敷設済みであること、及び外周部に跳びこんだり、枝を伝って侵入するような障害物も無かったことから、ネット柵の外側に2段張りで電気柵を追加設置する対策を提案した。
- 電気柵は、地上から10～15 cm程度とし、加害動物がネット柵の下を潜ったり、噛み破ろうとするのを防ぐ効果があることを説明した。
- 一方、既に設置済みのネット上の電気柵については、乗り越え防止の効果が期待できるため、そのまま通電することを推奨した。
- 電気柵の内側にネット柵を敷設する方法は、防風ネットを敷設することが一般的なブドウ園地では、コストをかけ過ぎずにとれる好適な対策であり、ネット柵の裾留めがしっかりしていれば、他の獣種に対しても有効な対策となり得ることを説明した。
- 最後に、北部にある赤枠内のブドウ園地や東側のガラスハウスのブドウ園地についても視察し、同様の対策で被害の防止に効果が期待できることを説明した。

③ 東軽部地内（2025 年 10 月 1 日実施）

【現地踏査】 2025.10.1、15:00～16:00

【背景と相談内容】

- 8 月中旬（お盆過ぎ頃）から 9 月中旬にかけて、中型獣類によるものと思われるブドウ（シャインマスカット）の食害が発生していた。
- 当初は、ガラスハウスの裾部分のブドウのみが食害されていたため、タヌキ等による被害と見過ごしていたが、中盤から棚上部のブドウまで食べられるようになり、被害が深刻化したため、市役所に相談した。
- 被害が途中で止まった理由は不明だが、近くの猟師さんにわなを仕掛けてもらった際、アナグマらしき中型動物 1 頭を捕獲したのと、周囲の農地でもアライグマやハクビシン等の中型動物が複数捕まったと聞いているため、その効果かもしれないと考えている。
- 今年は、他の圃場の管理に手がかかり、当該圃場にはあまり手を掛けられなかったが、来年に向け、対応策を提案してほしい。
- 対象園地は、古いガラスハウスで、壁際に植えたブドウの樹がアーチ状に枝を伸ばし、それに沿って房をつける樹形で仕立てられていた。



ガラスハウス内のブドウ栽培の様子



ブドウの食痕
(樹上には古い食痕が多く認められた)



ガラスハウスの外観
(裾部分に補強の跡が多く見られた)

- 外周には、亀甲金網が貼り付けられていたが、複数箇所に突破された痕が認められ、天井部ではなく、地上から侵入されているものと考えられた。
- 突破された箇所には、板や強度の高い金網を追加して補強していた。
- 侵入を抑制するため、ビニールシートを下げると、シートを破られて侵入されたという。

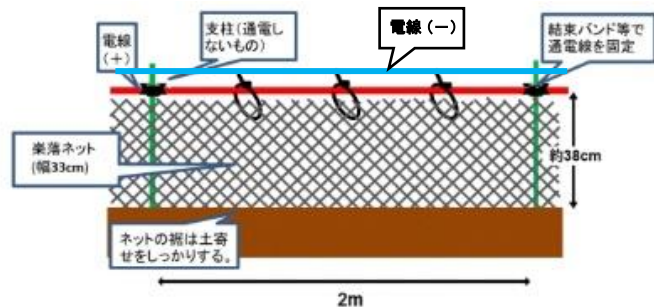
【指導の実施】

- ガラスハウス 2 棟を囲い込むように柵を設置する対策を提案した。
- ガラスハウスの外周には、分厚い防草シートが敷設されており、電気柵を敷設する際には、シートを剥がす必要があることを伝えた。
- なお、外周の防草シートを剥がすことが難しい場合は、背の低いネット柵に電気柵を組み合わせる方法を提案した。



ガラスハウスの外観 (外周全体に分厚い防草シートが敷設されていた)

- ベースは、埼玉県農業技術センターが開発した「楽落くん」の敷設方法を紹介することとし、その上段に張る電気柵を対極の2段張りにすることで、動物が柵を乗り越えようとする際に通電するような構造を提案した。



楽落くんの図を基に改訂した柵の設置方法
(電線 (+) の上 5 cm 程度の所に電線 (-) を追加)

- 防護資材の購入に際しては、市の補助を受けることができるため、購入前に市役所に相談するよう伝えた。
- 後日、相談者に防護柵の設置資料を届けることを約束した。
- 市担当者からは、補助金申請について、申請書に見積書を付けて提出することで補助を受けることができると説明いただいた。